



洋雑誌の電子ジャーナル化計画

雨乞 久美

I. はじめに

2012年、前任者から定期購読タイトルの電子ジャーナル化計画を引継ぎ、2013年を初年度とし、2014年を経て2015年で完了する3年間の計画は順調に進行中である。この計画に入る準備として、冊子体で購入しているすべてのタイトルの電子ジャーナルを購入し、冊子体+電子ジャーナルとする購読形態が整えられた。続いて、初年度である2013年、2014年と徐々に冊子体の購入を減らし、2015年1月購読分からは冊子体を購入しない予定である。これによって、すべての洋雑誌タイトルが電子ジャーナル化される。

2008年、雑誌購入時無料付加電子ジャーナルが有料化されたことを契機とし、洋雑誌については電子ジャーナルへの移行を行うこととなった。電子ジャーナル化を進めるにあたり、「電子ジャーナル化3カ年計画」を図書委員会で審議し、その結果、病院の方針として2013年を初年度とする3年間で電子ジャーナル化を進めることが決定された。

冊子体から電子ジャーナルへ移行するにあたり、冊子体になじみのあるベテラン医師からの反発が危惧されたが、電子ジャーナルに徐々に慣れてもらう方法が功を奏し、無事に電子ジャーナル化を終えようとしている。まず、電子ジャーナルの利用に慣れてもらうために、購読中の全てのタイトルについて電子ジャーナルを購入し、冊子体+電子ジャーナルとする方法をとった。診療部長に声をかけながら理解を得

つつ、徐々に冊子体を減らし、電子ジャーナルのみとしていった。計画途中ではあるが、前任者から始まった電子ジャーナル化計画について報告する。

II. 電子ジャーナル化計画

1. 計画内容

当院では、2008年3月末で雑誌購入時無料付加電子ジャーナルが有料化されたことを契機に、洋雑誌の電子ジャーナル化が始まった。和雑誌については、電子ジャーナル化せずに冊子体のみを購入している。利用者から電子化の要望も出ていないため、今後もこのまま冊子体での購読を継続する予定である。

2008年に雑誌購入時無料付加電子ジャーナルが有料化されることを受け、A:冊子体+電子ジャーナルを購入する場合と、B:電子ジャーナルのみを購入する場合とを価格比較したところ、ほぼ同額かBの方が高くなる結果となった。そのため、すべてのタイトルについて、電子ジャーナル+冊子体で購読することになった。

ここで冊子体を電子ジャーナルへ変更するのではなく、もともと購入している電子ジャーナルはそのままに冊子体の購入が減るだけという流れをつくった。

2. 計画・実施

【計画】

(1) 2011年：全91タイトル。

冊子体+電子ジャーナル 90タイトル

冊子体のみ 1タイトル

(2) 2012年：全102タイトル。

冊子体+電子ジャーナル 57タイトル

電子ジャーナルのみ 45 タイトル

冊子体のみ 0 タイトル

- (3) 2013 年：全 102 タイトル。
(冊子体の購入を減らし、電子ジャーナルのみの購入タイトルを増やす。)

冊子体+電子ジャーナル 45 タイトル

電子ジャーナルのみ 57 タイトル

- (4) 2014 年：全 102 タイトル。
冊子体+電子ジャーナル 23 タイトル
電子ジャーナルのみ 79 タイトル

※ 2013 年～2014 年に削減した冊子体購入費用を、新規タイトル購入費用に充てる。

- (5) 2015 年：全 102 タイトル。
(3 カ年計画の終了年。全てのタイトルを電子ジャーナルで購入する。)

冊子体+電子ジャーナル 0 タイトル

電子ジャーナルのみ 102 タイトル

【実施】

- (1) 2011 年：計画通り実施済み。
- (2) 2012 年：計画通り実施済み。
(全 101 タイトル。冊子体のみの購入なし。)

冊子体+電子ジャーナル 55 タイトル

電子ジャーナルのみ 46 タイトル

- (3) 2013 年：全 102 タイトル。
(計画を上回り電子ジャーナル化を進めることができた。)

冊子体+電子ジャーナル 18 タイトル

電子ジャーナルのみ 84 タイトル

- (4) 2014 年：全 102 タイトル。
(計画通り実施済み。)

冊子体+電子ジャーナル 7 タイトル

電子ジャーナル 95 タイトル

※ 2013 年～2014 年に削減した冊子体購入費用は、洋雑誌値上がり分に充てるだけで、新規タイトルの購入はできなかった。

- (5) 2015 年：計画終了予定。
(冊子体購入を 0 タイトルへ。)

Ⅲ. 業務内容および業務量の変化

1. 軽減された業務

- (1) 配架
 - ・処理する冊数の減少により、新着雑誌の配架がスピーディーになった。
- (2) 製本
 - ・欠号チェックの業務が減少した。
 - ・製本費用が約 20 万円削減された。
2011 年分製本 (345 冊)：483,000 円
2012 年分製本 (211 冊)：295,400 円
- (3) 目視での利用者数確認とりやめ
 - ・前任者より目視での利用者統計を引き継いだ。電子ジャーナル化が進み「図書室利用者＝雑誌閲覧者」とは限らないため、目視での統計は取りやめた。

2. 加重された業務

- (1) 電子ジャーナル契約内容の確認
- (2) 接続不良時の対応
 - ・いつでも閲覧できる冊子体と異なり、接続できない場合など、書店への確認が必要となった。
- (3) 文献複写業務
 - ・電子ジャーナル化を進めていく中でパッケージ契約を締結することもあり、扱うタイトル数は冊子体購入時よりも増加している。このことからすると、文献複写申込件数は減少しそうなものだが、実際には文献複写業務にかかる時間は年々増大している。受付件数には大きな変化は見られないが、申込件数が大幅に伸びている (図 1、2)。これは、前任者の積極



図1 文献複写申込件数



図2 文献複写受付件数

的な活動により2011年8月から文献検索システム「医中誌 Web」の利用を開始し、職員にとって文献検索・複写依頼を行いやすい環境が整えられたこと、電子ジャーナル化によって端末を使用しての文献検索に職員が慣れてきたためと考えられる。

(4) 電子ジャーナルの利用統計

- ・各タイトルの利用状況を把握しておく必要がある。これは、今後予算内で洋雑誌を購入するにあたり、どのタイトルがより多く利用されているかを判断材料のひとつとするためである。

IV. 考察

当初の予定では、冊子体を徐々に減らし、その冊子体購入費を新規電子ジャーナルの購入に充てるという計画であった。しかし、計画時には洋雑誌は毎年値上がりするということが考慮されておらず、実際には削減できた冊子体購入費用を値上がり分に充当することで終わり、新規タイトル購入は難しい状況であった。

洋雑誌が毎年値上がりすることは、図書館担当者にとっては常識ではあるが、その他の会計担当者には当然のことと捉えられていないので、十分な説明をし、理解を得ることが必要である。

洋雑誌の値上がりについて理解を得る必要があるのは、事務部門だけではなく利用者である診

療部門も同様である。冊子体をなくし電子ジャーナル化する際には、各診療部長への状況説明が重要である。2012年に冊子体を削減した時には、ご協力いただいた診療部長に対する説明および報告は配付した用紙のみで行われた。口頭説明がなかったために、後日、一部の医師より反発が出た。2013年、2014年も2012年に引き続き、計画を上回る大幅な冊子体削減を実施したが、すべての診療部長に洋雑誌の値上がりや消費税増税も含めた状況説明をし、理解を得ることができた。各施設により利用者は異なると思われるが、当院での洋雑誌利用者はほぼ医師である。病院の計画とはいえ、慣れ親しんだ冊子体の購入を断念し、電子ジャーナル化に協力して下さった先生方には、感謝を伝え、よりよい関係を築いていくことが大切である。

V. おわりに

2013年、2014年と冊子体削減分を洋雑誌値上がり分に充当していたが、今後は、削減する冊子体がない状態となる。そのため、電子ジャーナルのタイトル数の見直しには、利用アクセス数を利用する方法をとることになる。各診療科の定数なども考慮し、慎重に議論していかねばならない。購入雑誌はすべて継続購読を基本としており、タイトル削減となることには強い抵抗がある。だが、洋雑誌の値上がりが止まらないかぎり、図書室の苦しい状況は続く。限りある予算の中で、いかに利用者の満足度を上げていくか、それが今後のテーマである。

参考文献

- 1) 山室真知子, 野原千鶴, 飯田育子: 製薬会社の文献情報サービス自粛による影響—病院図書室ネットワークによるアンケート調査の分析—, 情報管理, 1994; 37 (9): 759-70.
- 2) 緒方宏子: 電子ジャーナル利用促進報告, 日赤図書館雑誌, 2012; 19 (1): 21-4.